

自立するための生き方及び考え方の深化をめざして

Deepening lifestyles and ways of thinking for independence

勝田 みな

Mina Katsuda

〈摘要〉

人はかかわりの中で生きており、かかわりを深めることが、自らの生き方や考え方を成長させていくと考えられる。しかしながら、どのように人間関係を持てばよいのかわからなかったり、傷つくことを恐れたりして、人とのかかわりを避けてしまっている学生（若者）がいる。本研究では、これまで担当してきたカウンセリングの授業をふりかえり、ピアヘルパー資格取得のための学びをきっかけにして、生き方及び考え方を深めて自立するために必要なことと課題について整理していくことにした。

今後の課題として授業内だけではカウンセリングスキルはなかなか身に付かないため、授業外での体験をとおしてカウンセリングの有効性を実感できるように、学生同士が自習を進めていけるような指導に取り組みたい。また、大学行事等でピアヘルパー資格取得者・学習者が実践活動できる場があれば、大学入学から卒業までを見通しての活動が可能になると考える。

〈キーワード〉 カウンセリング 自立 人とのかかわり 対人援助 自己理解

I. はじめに

最近、教育関係者にしばしば取り上げられる「9月1日問題」のため、各方面から「学校へ行かなくても構わない」というメッセージが発せられている。2015年8月に神奈川県鎌倉市図書館が、ツイッターの公式アカウントで、「もうすぐ二学期。学校が始まるのが死ぬほどつらい子は、学校を休んで図書館へいらっしやい。マンガもライトノベルもあるよ。一日いても誰も何も言わないよ。9月から学校に行くくらいなら死んじゃおうと思ったら、逃げ場所に図書館も思い出してね」と投稿して話題になった。いじめを苦にして自殺したり不登校になって自宅にこもったりする子どもたちの数は、留まることなく増加している。文部科学省（2016）は、「小・中・高等学校及び特別支援学校における、いじめの認知件数は224,540件（前年度188,072件）である」と過去最多数を公表した。また、「いじめ防止対策推進法」（2013年9月施行）から3年が過ぎても被害を受けた子どもが最悪の道をたどってしまうという悲劇がなくなっていない。子どもたちは悩みや不安な

どから傷つき、周囲とのかかわりを絶ち、自分から話すことができなくなっている。西山ら（2002）は、「生徒らは、仲間によって支えられることを知っており、それを十分活用できる者ほど、支援の糸口を多く持つといえよう」と述べているが、仲間同士でお互いにかかわる中で成長を促すことができているのである。

学生の中にはさまざまな経験をして入学した者もいる。入学理由をたずねると多様ではあるが、比較的多いのは資格を取得して仕事に生かしたいからである。新しい環境で新たな資格を取得するために懸命に学び、ただ資格取得のためだけではなく、将来の生き方及び考え方に生かしたいという強い意志を持っている。この真摯な思いを維持するためには、学生生活の過ごし方が重要な課題になる。

II. 人をヘルプするカウンセリング

1. 生き方及び考え方の深化をめざして

学校で出会った友人に、「何でも悩みを相談できる人がいるか」をたずねた質問に対する回答で、現在の生活の充実度を比較してみると、何でも悩みを相談できる人が「いる」と感じている者は、「いない」と感じている者に比べて、現在の生活について「充実している」と回答した者の割合が高い（子供若者白書 2017）。人はかかわり中で生きており、それは、自分の生き方や考え方を深化させ、自立を促していくと考えられる。しかしながら、どのように人間関係を持てばよいのかわからなくなったり、傷付くことを恐れたりして、人とかかわりを避けてしまっている学生（若者）がいる。かつて岡山県教育センター（2001）では、「ピア・サポートを高等学校に取り入れるための実践的研究」の中で、「もし学校の中でそういったこと（本音で話し合い、支え合えるような人間関係）を学ぶ場を意図的に提供するならば、生徒たちは確実に変わり、もっと前向きに人間関係を結んだり、失敗した時の立て直しを図れたりするようになるであろう」と提案し、その一つの方法として、ピア・サポートは大変有効であると述べている。

対人援助の仕事に就こうと決めて入学した者については、特に人とかかわりは重要になってくるため、少しでも自信を持って成長を感じながら深く人とかかわって生きていけるように支援・指導を続けてきた。仲間を援助していく力を身に付けていくには、学校という場を大いに活用していくことが最適であるはずだ。人をヘルプするカウンセリングを学ぶことによって、自分のため、人のために生かせるように、まずは身近な学生生活で活用できるように学びを深めていく。

N短期大学健康福祉学科は、「健康と癒しで人の幸せを願う」というスローガンのもと、2017年度よりピアヘルパー資格に替わって「福祉心理士」資格取得をめざして心理アプローチを創った。これは、内面をターゲットに相談援助ができる介護福祉士をめざして、より興味・関心を持てるプログラム構成になっている。対人援助の仕事に就く学生たちは、

心理系の学びを進めることによって、仕事にも実生活にも生かせるようにするために、資格取得をきっかけにして自己肯定感を高めていくのである。

2. 資格取得

ピアヘルパーの資格（NPO 日本教育カウンセラー協会認定）は、学生を対象とした民間の資格である。2017 年度 2 年生までではあるが、N 短期大学では、「カウンセリング概論」、「カウンセリングスキル」（筆者担当）、「青年期の心理学」（2017 年度のみ筆者担当）の 3 教科 6 単位を取得した者または取得見込みの者が、年 1 回実施される筆記試験（選択式問題と記述式問題）に合格すると取得できる。ピアヘルパーとは仲間を助けるという意味になり、問題や悩みごとの相談相手になる。國分（2012）は、「仲間に対して『旅の道づれ』になることです。『旅の道づれ』になるとは、①話し相手になること、②荷物番をしたり荷物を背負ってあげたりすることです。つまり言語的・非言語的なコミュニケーションを通して、仲間に生への意欲をあたえることです」と述べており、対人援助の仕事に就こうとしている学生には、自信を持って対人援助の実践をすることができる資格である。

3. 目的

カウンセリングに関する理論などを学習することによって、自分自身のカウンセリングマインドを高め、自己を成長させることができることを知るようになる。そして、自己理解ができ、他者の良い面に気付き、人を尊重する気持ちが出てくることにより、自己肯定感を味わうことになる。学生生活において、人の相談に乗ったり、サポートをしたり、時にはリーダーとして活躍の場が与えられれば、これまで未知であった自分を知るきっかけとなり、潜在意識から顕在意識への変容が起こる。それは、自己の生き方や考え方の深化をめざすことにもつながっていく。

以上のことから本研究では、これまで担当してきたカウンセリングの授業をふりかえり、ピアヘルパー資格取得のための学びをきっかけにして、生き方及び考え方を深めて自立するために必要なことと課題について整理していくことにした。

ここで言う「自立するため」というのは、自己理解・他者理解、自己開示を繰り返し体験する中で、人の面倒をみることなどができるようになり、人としての生き方や考え方をじっくりと推し進め、良き人生が送れるように取り組んでいくことである。

Ⅲ. カウンセリング授業について

研究対象者は、N 短期大学健康福祉学科 1 年生である。総合教育科目の選択教科として希望者が受講してくる。筆者は、2013 年度より「カウンセリング概論」、「カウンセリングスキル」の教科を担当している。受講生の割合はその年によって違いはあるが、学生

数の 65%～95%だった。

授業形態は、講義中心であるが、ペアあるいはグループによる学習を組み合わせるなど、演習も取り入れた。授業の終わりにはミニレポートを提出させた。また、さまざまなタイプの人ともかかわれるように、毎時間あるいは授業の中でも座席はペアあるいはグループのメンバーを替えて、他者の良い面に多く気付けるよう、意図的に人とのかかわりを作る環境を設定した。「カウンセリング概論」の受講が終了した者は、「カウンセリングスキル」を受講していくようにカリキュラムを組み立てた。

1. シラバスを比較する

ピアヘルパー資格に必要な教科のシラバスを 20 ケース抽出した。抽出方法としては、短期大学、ピアヘルパー資格、カウンセリングなどのことばを検索し、シラバスを調べてみた。まず、授業のねらいに出てきた言葉は表 1 のとおりである。

表 1 授業のねらいで出てきた言葉

| 他大学 | N 短期大学 |
|--|--|
| 人間関係、日常的、カウンセリングの基礎、基本的姿勢、対人援助、諸問題の対処、基本的な知識・技法、体験、人間観、対人関係調整力、相談支援、考え方、行動、支援、心がまえ、自己理解、気付き、理解を深める、コミュニケーション、人とのかかわり、感情、他者の考え、積極的、課題達成 | 基本的な理論、技法、自己理解、他者理解、成長、人とのかかわり、実践力、自分のため、自立できる人、人間味、スキル、身に付ける、人間関係、円滑、体験、人間力、自己肯定感 |

カウンセリングの授業でのねらいで出てきた言葉を見ると、他大学とはそれほど大差がなかった。学生は、人へのかかわりには他者を主人公に考えるので自分のことは後回しと考えがちである。自分自身がしっかりと安定した心でなければ、人の役に立つことや対人援助の仕事に就くことなどは、到底やっていけないことを伝えるためにも、N 短期大学ではあえて「自分のため、自立できる人」をねらいに掲げた。

また、理論だけではなく体験をとおして身に付けることは、体験の機会が乏しいといわれる学生には欠かせない取り組みであり、自分自身を理解するためにも必要な内容である。この体験を繰り返すことによって、満足に学生生活を送れていると感じるようになっていくことが、具体的なめざすところとなった。体験には個人、ペア、グループでの活動がある。他大学では、構成的グループエンカウンター（SGE）を取り入れているのは 1 ケース、ロールプレイや実習を取り入れているのは 10 ケースあった。N 短期大学の体験においては SGE を積極的に取り入れた。これは、ピアヘルパー資格を認定している NPO 日本教育カウンセラー協会において、筆者が上級教育カウンセラー資格を取得していることに関連し、テキストの流れにも即した指導が可能であったからだ。ピアヘルパー資格取得をめざすため、授業で使用するテキストは、「日本教育カウンセラー協会編ピアヘルパー

ハンドブック」が多かった。資格取得だけをめざすのではなく、自分自身のキャリアを描く中で、生き方を示唆するような内容になっている。

2. カウンセリング概論

N 短期大学健康福祉学科1年生が総合教育科目の選択教科として前期に受講した。学修目標は、「カウンセリングの基本的な理論・技法について理解する。カウンセリングを学ぶことにより、自己理解・他者理解を深め、自己を成長させることができることを知る。人とのかかわりが重要である職業に必要な実践力を身に付ける」である。

(1) 構成的グループエンカウンター (SGE)

使用したテキストは日本教育カウンセラー協会編「ピアヘルパーハンドブック」であり、また適宜ワークシートを利用した。そして毎回の授業では、構成的グループエンカウンター(以下SGE)を積極的に取り入れた。テキストでは、SGEのねらいとして、ふれあい体験と自他理解の2つが挙げられており、無理なく体験を行い、自己開示が自由にできるように表現したり、時には沈黙を行い、自己開示したくない自分を許したりした。

SGEはエクササイズ方式で、課題を出す方式である。エクササイズのあとには必ずシェアリングを行い、エクササイズの感想を述べた。「今、ここ」での感情を語ることによって、気付かなかった自分に気付くことができ、同時に他者の一面も理解するようになる。この体験を繰り返すことによって本当の自分に気付いていく。これを自己発見と言う(國分2012)。

対人援助の仕事に就くと、いずれはリーダーとして活躍することであろうということで、SGEリーダー体験も行った。自分には自分の考えがあることをしっかりと認識する必要がある。すなわち、「私はこう思う(思考)」、「私はこう感じている(感情)」、「私はこうしている(行動)」と自分を打ち出だす勇気をもっている人、これがSGEのリーダーを志すピアヘルパーのイメージである(國分2012)。リーダーには不向きと考えている人もいるだろうが、どちらにしても自分を打ち出だす気概を持ち、自己肯定感を味わわせ人を尊重することができるように積極的に繰り返し体験を行った。

(2) 授業をふりかえって

筆者がカウンセリングの授業を担当して5年目になるが、ピアヘルパー資格を取得する学生にとっては、筆者担当の「カウンセリング概論」、「カウンセリングスキル」の単位を取得する必要がある。健康福祉学科の学生は介護福祉士の資格を取得することが大きな目標であるが、対人援助の仕事に就こうとしている学生にはカウンセリング授業は実用的で学生生活にも役立つ授業である。

学修目標で示したが、「カウンセリング概論」ではまずは自己理解を深めるように進め

た。人とかがかわれる人もいろいろなタイプの人と接するように工夫し、積極的に働きかけることができるよう、まずはやってみることの大切さを指導した。基本的な理論、技法を学ぶことにより、思い込んだり押し付けたり、自己満足したりなど偏った思考感情行動をしないよう、自分自身のふりかえり、自己点検ができた。また、授業の終わりには本時をふりかえっての感想（今ここで思うこと）を書かせ、紙面上での筆者とのやりとりを確立させた。上手に作文を書くのではなく、自分の気持ちを文字で表現することが大切なことを話し、毎時間、書いていくことによって、自分の気持ちを素直に表現することができるようになってきたことを学生自身が実感してきた。感想には筆者のコメントを書き、授業の場で全体に話した方がよい内容については学生からの許可を取って、授業内で紹介した。

改善すべき点は、ペアやグループの組み合わせでその時間の学習が決定づけられてしまうことである。これは「カウンセリング概論」の授業だけでなく、どのような状況でもありうる。そのため、カウンセリングを学ぶことにより、お互いがどうしたらよいのかを考え、実行に移せるように具体例を入れた講義を繰り返し行った。自分のことをどう思うのかは相手が決めることであり、人の好意を素直に受け入れることができない人もいるということも伝えながら、せめて授業の中だけでも「～にチャレンジする」ように指導した。

授業効果としての学生からの感想・意見は、「人とかかわりが重要だと感じた」、「特に自他理解が深まったと感じた」、「受講している人たちの人間関係が良く、ペアやグループでの学習は誰と組んでもスムーズに進んだ」などが挙がり、積極的かつ意欲的にどの場面でも表現できるようになってきたからこそその結果であると感じた。

3. カウンセリングスキル

N 短期大学健康福祉学科1年生が総合教育科目の選択教科として後期に受講した。「カウンセリング概論」と合わせて、学修目標は、「カウンセリングの基本的なスキルを身に付ける。人間関係を円滑にするために必要とされるスキル向上とそのスキルを生かしたカウンセリングの実際を体験することにより、人間力を高めるための技術を修得する。自己肯定感を味わい、他者の良い面に気付き、人を尊重することができるように体験活動を実施する」である。なお、2017年度からは新しく心理アプローチとして「福祉心理士」の資格取得をめざすため、この教科は、2016年度までの開講となった。

(1) ピアヘルパーの心がまえ

ピアヘルパーは、人を援助するために話し相手になることである。雑談や日常会話とは違い、「相手の思考か感情か行動かのいずれかが、変容するきっかけになる対話をする」と國分（2012）は述べており、ピアヘルパーの心がまえは必要である。しかし、心がまえは持っただけで理解しているつもりになっている場合がある。そこで、メンバーからのフィードバックをもらったり、教員からの指導を受けたりして、意識していくことがまず重要に

なってくる。常に授業内ではシェアリングを行い、学生生活や将来の仕事に生かせるよう根気よく話し続けた。

(2) ロールプレイ

理論で基礎的なことを学び多少なりともスキルが身に付くと、次に体験活動が重要になる。授業での学びを学生生活の中に生かせることがめざすところである。これは自分のためにもなり、それ以上に人のためになることであるため、自己肯定感をますます感じられる点でもある。

この体験をより実感させるために、ロールプレイを行った。疑似体験ではあるが、いきなりの面談シーンで相手を傷つけたり傷つけられたという印象だけが残ってしまったりしたら、スキルを身に付ける前に抵抗を感じてしまう。そのような事態を防ぐため、ケースを与えてそれぞれの役割（話し手、聴き手、観察者）のもとで最初の3分間、対話の練習を行った。終わったら、対応の仕方で良かった点、改善すべき点を伝え合い、観察者からも感想を伝えさせた。この方法を繰り返すことにより、自分の癖や得意なこと、不得意なことがわかるとともに、他者のこともわかってくる。また、ロールプレイの良い点は、意図的な場面設定ができることである。例えば学校生活で遭遇しそうな場面や沈黙の場面、攻撃的な場面などにどのように対応していくとよいのかなど、さまざまな状況を体験した。

基本的な技法としては、言語的技法（受容、繰り返し、明確化、支持、質問）を取り入れて、スキルアップをめざした。また、非言語的技法では相手を観察し、ロールプレイでの自己評価を行って、ピアヘルパーの心がまえも意識して進めていった。そして、ロールプレイ後には必ずシェアリングを取り入れて、ふりかえりを十分行った。授業の始まったところと終わりごろと比べると、自分自身の変化を感じられたという学生もおり、このプラスの体験を学校生活に生かそうという気持ちにもつながっているという。

(3) 授業をふりかえって

「カウンセリングスキル」では、人間関係を円滑にするために必要とされるスキルを身に付けることを中心に行った。技術を身に付けることばかりに焦点をあてると、うまくいかない場合は嫌になってくるし、自信もなくなってしまう。逆にたまたまうまくいったと感じると、その方法に固執して幅の狭いやり方しかできなくなってしまう。スキルを身に付けるには、繰り返し行うことが重要であるので、時間が来たらすぐに次の動作に取り掛かれるよう、嫌な気持ちを引きずらない工夫が必要であった。この体験がスムーズにいくようにするためにも、授業においてもSGEを取り入れて楽しいエクササイズ、ためになる（得する）エクササイズ、価値を学ぶエクササイズ（明里2008）を意識して行った。

改善すべき点は、2点ある。1点はペアやグループでのメンバー構成についてである。特に体験では普段、一緒に行動していない人との学びの方が、照れや遠慮（相手が良いと

思われることを話すなど)が出ないため、いろいろなタイプの多くの人との学びを推奨している。また、学びを深めていくために、お互いのメンバー構成を全体で見て、本時の学習がこのメンバーで、できそうかどうかの確認も行っている。お互いを高め合うためには、なるべく全員が平等であると感じられることが重要だからである。しかしながら、実際にカウンセリングが始まってみると、なかなか活動ができないのである。うまくやらなければという気持ちが働きすぎたり、できない自分への落ち込みだったり、反省しきりのメンバーも出てしまう。そのような時はシェアリングをしっかりと行い、全体で話せる場合は感想を出してもらうこともあった。また、実際に筆者がスキルの進め方をデモンストレーションして見せたこともあった。うまくいった時もあればいけない時もあり、率直にここでこのようにすると良かったという自己評価も付け加えることによって、理解を深めていった。

もう1点は、授業以外での学習を積極的に行えなかった点である。反復練習を行い、しかも同じ学びをしている友人同士でカウンセリングスキルの自習に取り組めなかったことは残念だった。仲間同士で少しの時間でも復習をすることによって力が身に付くが、それと同時に学校生活にも応用でき、生き方や考え方のヒントにつながるものである。自習への取り組みを学生に伝えなければならなかった。

授業効果としての学生からの感想・意見は、「スキルを身に付けるということは実習においても学校生活の中においてもすぐに活用できる」、「日常会話と違いスキルアップを少しでもできるようにしたい」、「普段の会話とは全く違う対話を行うので、授業が終了すると疲労感を感じた」など、カウンセリングの学習は非日常的な体験、学びであることを実証した。

IV. 考察

本研究では、これまで担当してきたカウンセリングの授業をふりかえり、ピアヘルパー資格取得のための学びをきっかけにして、生き方及び考え方を深めて自立するために必要なことと課題について整理していくことであった。

1. 自立するために

進学してまだ数カ月の学生に「自立」と言ってもピンと来ないだろう。この場合の自立は、「他に依存することなく、自分自身の判断に基づいて責任を持った行動をとること」である(新明解国語辞典 2012)。自立するためとは、どのような人をめざせばよいのだろうか。カウンセリングの授業を受けて自立するのではなく、自立しようとするのがまず重要であると考えた。自立しようという意識を持つためには、授業のねらいにも出てきているが、まずは「自己理解」が欠かせない。武田(1996)は、「クライアントを理解す

ると同じくらいカウンセラーは自分自身を知らなくてはなりません」と述べているが、カウンセラーとしてぶれない心を持つ、相手がどれだけ態度や行動に一貫性がなかったとしても、それに反応しないようにし、自分はどんな人間なのかを理解することが、まずもって必要である。そのために幼少期の自分について親や家族に聴いてみたり、学校での自分のことを友人に聴いてみたりして、自分が歩んできた生き方を知る。良いことばかりではなく、さまざまな問題に向き合い、悩んだり、悲しんだり、時には恨んだり、妬んだりするような面も持ち合わせていることが、ふりかえてみるとよくわかる。この聴き取りから自己理解ができることもあり、それによって人を尊重することができるようにもなってくる。

2. 今後のカウンセリング授業の進め方

シラバスの内容は他大学とほとんど一致していた。基本的な進め方をあえて変更することはせずに、学生たちの雰囲気や取り組み方を認知して進めていく。シラバスの内容が一致していたから変更しないのではなく、他大学と大きな違いがなかったのを安心と捉えたわけでもない。今の学生には必要であろうねらいの中の言葉であり、将来、生きていくために、何をどのように考えていくのかを深く掘り下げていくには、必要とされる点がねらいの言葉としてシラバスの内容が一致していたのだろう。また、資格取得をするという気力を受容して、資格取得をきっかけに学びが深まっていくように指導をしていく。

今年度でピアヘルパー資格取得の学生が最後になるので、学びを深めつつ理論が理解できるように指導し、選択問題・記述問題に自信を持って答えられるように理解させる。また、授業で学んだことが学生生活で少しでも生かせるようにするためにも、今まで以上に学生の言語的・非言語的な表現をよく観察し、授業の中でこれは学生生活で使えると思うことを具体的に示していきたい。さらに、失敗やできないことを恐れず、失敗から何かを学ぶことが大切である。和田（2011）は、「問題なのは挑戦をやめてしまうこと」と述べており、うまくいかなかったのは自分のせいではないことを強調している。たまたまやり方が良くなかったのである。「和田式『動けない』脱出法」の中では9点挙げており、自信のない学生や考えすぎてしまう学生には、「まず動かないと損だ」と話している。

生き方については、学生自身が将来に夢や希望が持てるように、一人一人に合ったキャリア分野の支援・指導も行った。それについては、今後も続けていくつもりだ。カウンセリングの授業での大きな目標は「行動変容」である。杉山（2016）は、「行動することで、自分の様々な側面が見えてきます。それにより、今まで気づくことができなかった自分のよさや、自分もまんざらではないという楽な気持ちを取り戻すことができます」と述べており、行動することによって思考が導かれ、自分自身を見つめることへの変化に気付くことが、大切になってくる。今までと違う思考から行動に移り、そしてまた思考し、再度行動するという繰り返しの流れにおいて、どのように動けるのだろうか。そのためにも

キャリア分野の支援も加えながら授業を展開していくことが、生き方及び考え方の深化をめざすことにつながっていくと考える。

また、人間関係を築くことがスムーズにできる学生と緊張したり躊躇したりする学生がいる。授業の中では、自分の殻を打ち破れるように支援しながら、学生の一步を後押ししていきたい。中畠（2015）は、「行動ありきの姿勢は習慣的な思考や感情の変化のきっかけを与えてくれる」と述べており、将来のキャリア形成に現在の各自が置かれている重要な面に、実は気付かせてくれていることにつながり、目には見えない前進があることを意識することが生き方を深めさせることである。

V. おわりに

人の役に立っていることを実感することは、人とかかわることで得られるものである。人が成長する過程で、スムーズな人間関係が築け、問題に直面しても乗り越えていける環境があれば、それに越したことはないのだが、人間関係がうまく築けなかったり、その状態を保っていけなかったりすると、些細なきっかけでコミュニケーションを取ることができずに孤立してしまう状況の者もいる。ひとりで悩みを抱えてしまい、周囲とのかかわりを閉ざし、さまざまな問題をいくつか合わせ抱え込んだ状態に陥る場合もある。人とかかわることの重要性を再認識させるためのカウンセリングについて、今までの授業をふりかえり考察した。

人について知り、それを生かし、共に生きやすくするには、スタートがたとえ違っても目標とするゴールが同じなら（例えば資格取得）、学生同士がお互いの差異を発見しさまざまな場合の想定をしていくためにも、心のコントロールが必要不可欠ということである。社会で活躍ができるように、勇気を持って人とかかわる気持ちを持続させられるよう、まずは、学生生活を充実させていくことが重要になってくる。

2017年度よりN短期大学では、心理アプローチとしての学びを深め、「福祉心理士」資格取得をめざすことになった。名前はちがえども心理系の学びに変わりはない。自立するための一步を確実にできるよう、ルールに則って一人一人に合った指導を行ってきたい。また、授業内だけではカウンセリングスキルはなかなか身に付かないため、体験をとおしてカウンセリングのよさが実感できるように、学生同士が自習を進めていけるような指導に取り組みたい。さらに、大学行事等でピアヘルパー資格取得者・学習者が実践活動できる場があれば、大学入学から卒業までを見通しての活動が可能になると考える。これらが、今後の課題でもある。

註：引用文献・論文

- 明里康弘 (2008) 『どんな学級にも使えるエンカウンター 20 選』 図書文化 p.30
- 岡山教育センター (2001) 「ピア・サポートを高等学校に取り入れるための実践的研究」
- 神奈川県鎌倉市図書館 (2015) https://twitter.com/kamakura_tosyok/status/636329967668695040
2017/9/15 閲覧
- 國分康孝 (2012) 日本教育カウンセラー協会編 『ピアヘルパーハンドブック』 図書文化社 pp.2-3 pp.10-11 pp.14-15 p.28 p.52 p.85 pp.91-92
- 新明解国語辞典第七版 (2012) 三省堂 p.746
- 杉山雅宏 (2016) 『自分心読本』 悠々舎 P.50
- 武田建 (1996) 『カウンセリングの進め方』 誠信書房 p.144
- 内閣府 (2017) 「平成 29 年度子供若者白書 (概要版)」 pp.4-5
- 中嶋剛 (2015) 『とりあえず志向とキャリア形成』 日本評論社 P.166
- 西山久子・山本力 (2002) 「実践ピアサポートおよび仲間支援活動の背景と動向 —ピアサポート/仲間支援活動の起源から現在まで—」 『岡山大学教育実践総合センター紀要』 第 2 巻 pp.81-93
- 日本教育カウンセラー協会編 (2014) 『新版教育カウンセラー標準テキスト上級編』 図書文化社 pp.102-106
- 日本教育カウンセラー協会編 (2014) 『新版教育カウンセラー標準テキスト中級編』 図書文化社 pp.163-173
- 日本教育カウンセラー協会編 (2010) 『ピアヘルパーワークブック』 図書文化社 p.3 p.40
- 文部科学省 (2016) 「平成 27 年度『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』 (速報値) の概要」
- 和田秀樹 (2011) 『「あれこれ考えて動けないをやめる」 9 つの習慣』 大和書房 p.145